

ゲルツェンの「ロシア社会主義」論の成立

松原 広志

【要約】ゲルツェンは、ソ連邦の研究においては「革命的民主主義者」と強調され、「ロシア社会主義」論に典型的にみられる彼の空想的社会主義者としての性格は、ほとんど取り上げられない。しかし、彼の空想的社会主義者としての側面に照明をあて、「ロシア社会主義」の成立を見ると、そこには二つの契機が見出される。一つは、彼がロシア国内で自ら参加したスラブ派と西欧派の論争、他の一つは、彼がフランスで目撃した二月革命の敗北である。これら二つの契機を彼の著作によって吟味し、西欧の空想的社会主義思想との関連を考えながら、西欧主義者ゲルツェンがスラブ主義者との論争から何を学んだか、一八四七年に亡命した彼が西欧で何を見たか、とりわけ二月革命の衝撃がどのように彼の思想を規定したか、を述べるのが本稿の目的である。

史林 五〇巻四号 一九六七年七月

序

A・H・ゲルツェン(一八二一—七〇)に関する研究は、

今世紀になって本格的に始められたが、二つの類型に分けられる^①。第一はソ連邦を中心とするマルクス主義の立場によるものであり、レーニンの規定に従って、ゲルツェンをチエルヌィン、エフスキーたちとともに、農民民主主義の代弁者、人民革命による専制政治および農奴制の打倒のため

に戦った「革命的民主主義者」ととらえる。第二の類型はいわゆる西側諸国の研究が属し、西欧思想がロシアに及ぼした影響とそれへの対応の典型として、ロシアの社会主義の父としてのゲルツェンを、また、自由や個人の人格の尊厳性を熱烈に擁護した彼の近代的側面を高く評価する^②。ソ連と欧米の異なる立場からの研究は、ゲルツェンは、(1)革命的民主主義者か自由主義者か、(2)生涯革命家の立場を堅持したか改良主義者になったか、(3)唯物論者か観念論

者か、などの点で鋭く対立する。(1)についてはソ連でも、民主主義と自由主義とのあいだで動搖を示したが、という留保つきで、彼を革命的民主主義者と認める。他方、社会の徹底した改造を要求し(その方法はあいまいで、無政府主義に近いが)、ロシアの人口の大部分を占める農民階級の福祉を目的とする彼は、たんなる自由主義者というにはあまりにも「革命的」である。(2)については、ゲルツェンはバクーニンのように、身をもつてバリケード戦の中へとび込んでいく、という意味での革命家ではない。ラムベルトがいうように、「革命家」という言葉が非常に広く解釈されねばならない。(3)については、ゲルツェンのヘーゲル哲学研究をどう評価するか、が鍵となる。ソ連では、ゲルツェンのヘーゲル研究をマルクスのそれに近づけ、彼を確固たる無神論者、唯物論者として描く傾向がある。これにたいし例えばマリアは、ゲルツェンは無神論者、合理主義者ではあるが観念論の枠内にとどまっており、一八四八年以後の彼は、ヘーゲルを全く忘れ去ったかのようである、と述べている。ここでは、ゲルツェンの唯物論哲学は、社会や歴史にはそのまま適用されなかったことが注意されねばならない。

ところで、私が本稿でその成立を論じようとしている「ロシア社会主義」への評価はどうか。ソ連においては、「ロシア社会主義」にみられる空想的社会主義的な性格は、革命的民主主義者ゲルツェンの世界観の弱い面である、とみなされ、あくまで「科学的社会主義」によって克服されるべき思想、すでに歴史的役割を果たしおえた思想でしかない。(4)たしかに「ロシア社会主義」はナロードニキ主義は、ロシアにおける資本主義の発展を認識できず、革命運動の理論においても実践においてもマルクス主義に屈服した。しかしながら、その成立の時期、背景を考えてみよう。

近代ロシアが解決を迫られた問題は、ピョートル大帝の改革をめぐる展開したといえるが、この強力な西欧化政策をめぐる一八四〇年代、西欧派とスラブ派の論争が起った。「ロシア社会主義」は、この論争を一つの契機として、独自のプログラムをもたず西欧社会の模倣におわりがちな西欧主義と、西欧社会のゆがみを批判し伝統的な農村共同体へ逆戻りしようとするスラブ主義(どちらも現実を根をおろすことができない)とをのり越えて、積極的に、自由な人格の社会共同体をうちたてようとするものであったと

いえよう。

「ロシア社会主義」の成立には、いま一つの契機——一八四八年のフランスの二月革命がある。広くヨーロッパの思想史の上で一八四八年は、マルクスの『共産党宣言』とミルの『経済学原理』との発表に象徴されるように、近代の重要な転換点であることはいうまでもない。マルクスが期待をかけ、その挫折後あらためて、資本主義社会の再検討を決意した一八四八年の争乱に、ゲルツェンはどのように対応したか。彼にとり一八四八年はどのような意味をもつか。そしてそこに、ロシア的な背景がどのようにあらわれらるか。

「ロシア社会主義」は一方では西欧の思想と経験とにより、西欧の歴史の展開に即応すると同時に、他方ではロシアの伝統に密着してロシアの未来を模索しようとするものである。またそれは、ロシアが「ヨーロッパの憲兵」の地位を確認した年の事件を契機にして成立し、しかも、ロシアが西欧先進諸国より先に社会主義を実現できると説く、ロシアで最初の本格的な空想的社会主義の思想であり、マルクスによって克服されたはずの空想的社会主義が、ロシア

に定着したことを意味している。

マルクスと比較してゲルツェンを批判することは、いともたやすい。理論、実践両面で、ゲルツェンはマルクスに及ばない。彼らは同時代人であり、同時期にロンドンで亡命生活を送りながら意識的に反発し合い、個人的、思想的交流をさけ合った。しかし、空想的社会主義者と科学的社会主義者、ナロードニキとマルクス、ナロードニキ主義とマルクス主義の争い、などにおいて、二人の関係は、当人同志が意識していたよりはるかに大きいといえる。私は、ロシアの空想的社会主義者としてのゲルツェンを取り上げ、マルクスとミルによって代表される思想の流れとはやや異なるゲルツェンの思想を眺めて、ロシアにおける人間解放の歴史の研究の手掛りとしてたい。

次に、ゲルツェンの思想の時期区分を行なつて、その特徴を明らかにしたい。彼の思想は、人間尊重と、フランス大革命の結果にたいする不満とを根本にし、ロシアの専制政治と農奴制の打倒を生涯の課題として展開されたのだが、大きく三時期に分けられる。

第一期(一八四八年まで)。人間の解放、人間性の順調な

発展をめざし、かなり抽象的な言葉をあやつる。サン・シモン主義の倫理的、道徳的側面を撰取。その他、ルイ・ブラン、ヴァイトリンク、コンシデラン、ブルードンなど、主にフランス社会主義者の思想を知る。また、ヘーゲル哲学を研究して、「革命の代数学」と解釈。スラブ派と論争。西欧派内部で自由主義的立憲派と分かれ、社会主義派あるいは革命派の立場に立つ。

第二期（一八四八―五〇年代末）。一八四七年亡命したが、西欧に幻滅。祖国の未来を信じ、祖国に精神的に復帰。ロシアの農村共同体と農民を理想化し、反封建制、反資本主義の立場から、空想的ではあるが、社会主義的要求を提起。第一期より具体的に、共同体内での自由の問題を追求。

第三期（一八五九―六一年のロシアにおける革命的情勢以後）。「ロシア社会主義」への絶対的な信頼がうすれる。ロシアにおける変革の担い手を農民に求め、新聞「鐘」により革命の宣伝活動を展開。

本稿において私が扱うのは、第一期の末から第二期の初めにかけてのゲルツェンの思想の遍歴である。

① 彼の著作は、ロシアでは一九〇五年まで発禁措置をうけており、同

年、七巻の著作書簡集がはじめて出された。現在利用できるのは、決定版とされる三十巻著作集である。A. И. Дегер, *Собрание сочинений В. Г. Герцена*, тт. 1-30, 1954-1965. なお、ゲルツェン研究史については、次の書を参照。M. И. Пятковский, E. H. Дубинина, M. K. Дегер, A. И. Дегер *сочинения*, 1965. 外川継男「ゲルツェン研究覚書」(『ロシア史研究』第三巻第二号)。
② 「ゲルツェンの追想」『レーニン全集』(大月書店) 十八巻十四ページ。ソ連におけるゲルツェン研究のほとんど全部は、レーニンの規定の枠の中にあり、画一的であることは否めない。

③ A. Koyré, *Alexandre Ivanovitch Herzen, dans Etudes sur l'histoire de la pensée philosophique en Russie*, 1950; R. Hare, *Pioneers of Russian Social Thought*, 1951; I. Berlin, *Herzen and Bakunin on Individual Liberty: in Continuity and Change in Russian and Soviet Thought*, 1955; E. Lampert, *Studies in Rebellion*, 1957; M. Malia, *Alexander Herzen and the Birth of Russian Socialism 1812-1855*, 1961. わが国における最も活潑なゲルツェン研究、勝田吉太郎「ゲルツェンのナロードニチエストヴォ」(『近代ロシア政治思想史』一九六一年、第八章、二七九―四六七ページ)もこの系統に入る。最近の研究には、ゲルツェンとキルケゴールとの比較論がある。R. M. Davison, *Herzen and Kierkegaard*, E. Lampert, *Herzen or Kierkegaard?*, H. J. Blakham, *The Comparison of Herzen with Kierkegaard*, *Reply*; in *Slavic Review*, vol. XXV, no. 2, 1966, 6.

④ 『レーニン全集』十八巻十六ページ。例えば、ソ連での代表的なゲルツェン伝記を参照。И. Зяболов, *Герцен. Жизнь и творчество*, 1956, стр. 489.

⑤ 自由主義を政治的、宗教的権威への反抗と、この元来の意味にとれば、

ゲルツェンは自由主義者である。しかし、普通選挙制と議会民主政治が完全な政治制度であり、自由放任の原理にもとく経済政策が繁栄を保証し、より完全な生にむかっている人種の進歩に障害はない、という信念に立脚した自由主義に対しては彼は敵対的であり、その打倒のためには革命的行動をも辞さなかったといえる。

⑥ E. Lampert, op. cit., p. 192.

⑦ 『ラーニン全集』十八卷十三ページ参照。しかしながら、ゲルツェンが「史的観念論」者であることは一応は認められている。例えば、B. A. Malinin, M. И. Орлов, Преподственики научною социализма в России, 1963, стр. 85.

⑧ M. Malin, op. cit., p. 250.

⑨ Ibid., p. 378.

⑩ ソ連における最近の研究は、一八五〇年代末からのゲルツェンの革命宣伝活動を中心テーマとしており、彼が出版した雑誌や「北極星」の写真版などの復原もあれている。Kononov, Газета А. И. Герцена и Н. И. Орлова, 1962-1964; Подгруппа эсдека, Журнал А. И. Герцена и Н. И. Орлова, 1966—

⑪ ゲルツェンが社会主義について述べた次の個所に、彼の思想の根本的な骨格がうかがえる。А. И. Герцен, Очерки мир и Россия, Собрание сочинений т. 12, стр. 135. 以下、ゲルツェン三十巻著作集からの引用明示は「著作名、巻数、ページ数」の順序。

⑫ サン・シモン主義とその影響については О некое человеке в природе, т. 1, стр. 13, 25; Былое и Кумы т. 8, стр. 161-162. 金子幸彦訳「過去と思索」一、一九六四年、一〇六一—一〇七ページ。Письмо к Н. И. Орлову, т. 21, стр. 23, を参照。

⑬ Былое и Кумы, т. 9, стр. 23. 金子訳前掲書、二六八ページ。

⑭ 封建制とは、ツァーリスムのことであり、十九世紀になっても農奴

制が存在し、兵營と官房とを統治の支柱とし、合理的で厳正な規律をもつ国家統治の構造もとのつておらず、どのような思想であっても「下から」の改革をめざす場合にはこれを弾圧しようとするロシア帝国のことである。また反資本主義とは何かという点、当時のロシアには打倒するべき資本主義社会は存在しない。ゲルツェンは、一八四〇年代後半から五〇年代にかけての西欧資本主義社会の欠陥を外側から眺めて、これを思想的に断罪した、というのが彼の反資本主義の意味である。彼の西欧社会の現実をたいする批判は、現実の単純な否定へ、さらには現実の分析拒否へと通じたし、他方、ロシア専制国家の現実を批判する目は確かに鋭かったが、その解決策として、非合理主義的な方法を提起することとなった。ここでも農村共同体、農民を見る場合には、現実の分析は拒否されている。

一 ゲルツェンとロシア

ゲルツェンの思想形成上、一八四〇年代前半を中心とするスラブ派との接触は無視できない。ソ連邦のゲルツェン研究においては、彼とスラブ派との関係の問題は、ほとんど取り上げられない。しかし、ゲルツェンがスラブ主義思想をとりいれたことが、彼の理論の一貫性にとりマイナスであったから、あるいは、スラブ派が結局はツァーリスムを支持し、一八六〇年代以降、ロシア帝国の領土的野心を支持する汎スラブ主義へと変質、墮落していったからとい

って、彼が初期のスラブ主義思想の影響を受けたことを無視することはできない。本章で私は、ゲルツェンとスラブ派との關係を、一八四二―四五年の彼の日記、自伝『過去と思索』によって吟味し、彼が思想的にスラブ派に負うところがいかに大きかったか、を示したい。

1 スラブ派と西欧派

一八四〇年代はロシア思想史上、ピョートル大帝の改革の評価をめくり、スラブ派と西欧派との論争が花々しく展開されたことで記憶されるべきである。^① 両派の論争の根底には、「ロシアの歴史の道程は普通の西欧の人間の進歩の道程、西欧の文明の道程と同じであって、ロシアの特異性は、ただその後進性にあるにすぎないのか、それともロシアは独自の歴史の道程をもち、西欧とは全く別の類型に属する文明をもつのか」という問題、ロシアが進むべき未来の道はどのような道か、という問題が横たわっていた。^②

ロシアの国粹派というべきスラブ派は、ピョートル改革以後のロシアの西欧化を、より根本的には西欧文化そのものを批判した。彼らは、ヘーゲル哲学に代表される西欧の合理主義やローマ・カトリックを拒み、人間精神の全一性

回復の使命をおびたロシア、農村共同体のうえに成りたつギリシア正教の国ロシアが、没落する西欧文化にかわって世界を救済する、というメシアニズムに到達し、ピョートル以前のよき時代へ、農村共同体へかえれ、と主張した。これに対し西欧派は、ピョートル改革、ヘーゲル哲学を肯定し、西欧にならってロシアを近代化しようと考えたのである。^③

西欧派に属し社会主義と革命を唱えていたゲルツェンは、スラブ派の偏狭な正教信仰と、民族的伝統のなかの権威主義的要素に、とりわけ彼らのシヨービニズムとロシア文化の優越という主張にまっこうから反対した。スラブ派の誤りは、「ロシアがかつて、おのれに固有の発展の道をもっていたが、さまざまな事件とその後にきたペテルブルク時代によって、この発展の道はかき消されてしまった」と考えるところにある。^④ ロシアは一度もそのような発展の道をたどったことはなかったし、また、たどりうるはずもなかった、のである。彼らはペテルブルク時代を拒否し、国民へ復帰しよう、異国的な教養と政府による国民との断層を、以前の習慣にたちもどることによって埋めようとする。し

かし、歴史は復帰するものではないし、われわれには復帰する場所もない。なぜなら、ピョートル以前のロシアの国家生活はゆがんで貧しく、野蛮であったから、とゲルツェンは反駁する。^⑤ そのうえ、スラブ派のいう「国民への復帰、民衆との一体化」とは、民衆と同じ偏見をもつことではない。「(農村、労働者のアルテリ、ミールの集会、カザークの集団への復帰は) これらのものを、不動のアジア的結晶作用のなかに定着させるためではなく、これらのものの基礎となつてゐる諸原理を發展させ、解放し、これらのものをとりまいてゐる贅肉を、すべての本質的でない不純なものごとりと去るため」でなければならぬ。^⑥ しかるにスラブ派は、民衆のなかに理性を発達させるかわりに、おのれの理性を犠牲にすることを温順な、偉大な行為と考へてゐる。ここから彼らの不自然な信心深さ、教会儀式の遵守がうまれてくる。彼らが唱へる国民への復帰が真実のものでなかつた最良の証拠は、彼らが国民の内にとどんな同情も呼び起こさなかつたことである、とゲルツェンは批判の手をゆるめない。^⑦

スラブ派の正教理念には同意できないゲルツェンではあつたが、他方、彼らもロシアの現状に心を悩ましてゐる、

ということは認めることができた。彼はスラブ主義者の長所を、「人民のなかにあるいきいきとした精神の正確な認識」「現代という時代によってとらえられた、個人の滅亡の思想と人民の救済への確信」とみてとつた。^⑧ 彼はまた、スラブ派の理論の欠陥を批判しながらも、その代表者キレエフスキー、サマーリン、ホミャコフ、アクサーコフたちの人格、才能を高く評価し、個人的に尊敬してゐた。ゲルツェンにとり彼らは、「友なる敵」、あるいはもっと正確に言えば「敵なる友」であり、ゲルツェンと彼らは、「ロシアの国民、ロシアの生活、ロシアの考え方へのかぎりない、すべての存在をつつむ愛情」を共有し、「ヤヌスのごとく、あるいは双頭の鷲のごとく異なる方向を見ていたが、鼓動する心臓は一つ」なのであつた。^⑨ スラブ派こそ、「ロシアの未来」への信仰行為の連鎖反応をひきおこした原因ではなくとも、触媒であつたといえよう。^⑩

① Драго и кумиръ. 9, стр. 152. 金子幸彦訳『過去と思索』、三五三—三三三。スラブ派と西欧派の論争については、M. Mañia, Alexander Herzen and the Birth of Russian Socialism 1812-1855, Chap. 12. 勝田吉太郎『近代ロシア政治思想史』第一部を参照。

② 両派の論争の火付け役は、チャダーエフの『哲学書簡』である。同

書が与えた衝撃については、Былое и Думы, т. 9, стр. 139, 金子訳前掲書 三四四ページ。О развитии революционных идей в России, т. 7, стр. 223, 金子幸彦訳『ロシアにおける革命思想の発達について』一九五〇年、一三七ページを参照。

③ Былое и Думы, т. 9, стр. 149, 金子訳『過去と思索』一、三五二ページ。

④ Там же, 金子訳前掲書, 同所。

⑤ Там же, стр. 148, 金子訳前掲書, 同所。

⑥ Там же, стр. 148-149, 金子訳前掲書, 同所。

⑦ Там же, стр. 148, 金子訳前掲書, 同所。

⑧ Там же, стр. 147-148, 金子訳前掲書 三五〇ページ。

⑨ Там же, стр. 133, 金子訳前掲書 三四一ページ。

⑩ Кочетантин Сергеевич Араков, т. 15, стр. 9-10.

⑪ M. Malin, op. cit., p. 296.

2 農村共同体

ところで、ゲルツェンとスラブ派との接点として最も重要なのは、農村共同体である。彼は、ロシアの農村共同体が社会主義的性格をもつ、という見解をスラブ派から聞いたのである。元来、スラブ派は、共同体に家父長制的、正教的な社会の名残りを見出していたのだが、一八四〇年頃、ゲルツェンたちが西欧の社会主義思想を鼓吹するのに対抗して、「共同体には西欧社会主義が目標とするものはずべ存在しているから、西欧主義者が説くような革命的な新

制度はロシアには不要である」と反駁するため、社会主義的共同体という見解をうちだしたのであった。^②

このように、共同体の原理にもとづき、プロレタリア発生の防止、土地の割り替えを語るスラブ派に対しゲルツェンは、西欧派に一般的なように、否定的な態度をとった。

ロシアの農民に私有財産の観念がないのは、「一部分は未発達が原因なのである」^③。それより彼にとり絶対に見逃せない共同体の欠陥は、共同体における「自己の人格にたいする尊敬の欠如」、「ありとあらゆる抑圧の愚かしいたえ難さ」であり、一言でいえば、「このような諸条件の下で生活することの不可能性」なのである。^④

貧しく虐げられ、悲しむべき無関心の状態に陥っている農民を救い出すためには、一体なかが欠けているのであろうか。「スラブ人の家父長制的な生活様式のなかにまどろむ胚芽」、即ち「アルテリと農村共同体、利益の分配と耕地の分配、ミールの集会と自治体としての郷への村の統合」^⑤「われわれの未来の、自由な共同体的生活の建築の礎石」を大建築にするためには、「ながい歴史の到達点」である西欧の力強い思想が必要である。^⑥ 西欧的な個人の自由、権利

とロシアの共同体の結合という思考法は、以後、彼の著作にくりかえしあらわれてくる。共同体というシンボルを掲げたスラブ派が、解決したと称する「ロシアの未来」の問題は、ゲルツェンにとり真の解決にはなっていないのである。スラブ派のメシアニズム——「ヨーロッパの生の成果はスラブ世界で成熟し、現在を否定する科学に、ついには社会主義と共産主義の問題で未来を予見する科学に到達したヨーロッパは、自らの役目を終え、将来、スラブ世界が基礎となつて、好ましく有機的な発展がおこる」という願望^⑤——は、彼の興味をつよくひきはしたが、彼は、「ロシア国民に自己の破滅的な立場を理解させるかわりに服従——ギリシア教会の第一の美德、かつモスクワのツァーリズムの基本原則——を説き、ヨーロッパがロシアの奈落にまだ光をなげかけることのできる唯一の存在であるときに西欧への軽蔑を説き、さらに、東と西とに共通の未来のために、はむしろ離れる必要がある過去をほめたたえて」、「現状と和解する」^⑥ような彼らの態度を認めることはできなかった。

「ロシアの未来」の問題、ロシア的な道を進むべきかそれとも西欧的な道を探るべきか、の問題は、ゲルツェンに

ロシアの独自性——農村共同体を注目させた。彼は、共同体では個人の人格の尊厳性と自由とが保証されない、という点で、共同体に否定的な判断を下した。しかしながら、スラブ派が擁護した意味での社会主義的、というよりは連帯保証的な原理が彼の注意をひいたことも事実であった。

この時期の彼の思索の一応の結論は、次の言葉にうかがうことができる。個人、この観念をゲルマン人が世界にもたらした……だが、われわれには次のように述べる権利がないだろうか。すなわち、個人ではなく共同体を、自由ではなく同胞愛を、抽象的平等ではなく労働の有機的配分をスローガンとするような未来の時代は、ヨーロッパのものではない、と。ここに問題のすべてがある。スラブ民族は、ヨーロッパによつて受胎させられ、ヨーロッパの理想を実現して、老衰したヨーロッパを自らの生へ合併するであろうか。それとも、ヨーロッパがわれわれをその若返つた生へと合併するであろうか。スラブ派はこの種の問題を、あたかも解決済みの問題であるかのように、性急に裁決する。解決を示すものにはあるが、完全な解決にはほど遠い^⑦。

以上に述べたように、ゲルツェンがロシアの農村共同体に注目したのは、スラブ派とハクスタウゼンの示唆によってであった。しかし、より一層重要なのは、ゲルツェンがロシアの「出口なき現実」^①によってひきおこされる「絶望的な苦悩」の問題と、「ロシアの未来」の問題とを、誠実に追求していったことである。そのために彼は、西欧主義の粹を踏み越えて、伝統的なロシアの農村共同体に救済のシンボルを見出せるかもしれない、と考えたのであった。彼の思索は、ロシアの精神的背景、とくにチャダーエフにはじまる、ロシアの運命の問題への関心と切り離しては理解できないであろう。もう一つ注意すべきことは、ゲルツェンや彼の同時代人にとり、ロシアがヨーロッパより遅れていることが明らかであればあるほど、彼らはロシアの独自性に、農村共同体や農民に注意をむけたことである。ドイツにとり、イギリスやフランスが克服されるべき先進国であるとするれば、当時、ロシアにとって、ドイツをも含めた西欧が克服の対象であった。こうしてロシアは、自らの後進性を正当化し、さらには理想化をえとして、伝統的な共同体に将来の希望を託したのであった。^② ゲルツェンの

「ロシア社会主義」は、一八四〇年代の思索の中で、その萌芽が形成されていたといえよう。ただし、彼が「ロシア社会主義」を明瞭に宣言するには、彼の亡命（一八四七年一月）、二月革命敗北の目撃、「精神的破産」が必要であった。

① N. Riasanovsky, *Russia and the West in the Teaching of Slavophiles*, 1952, pp. 133-136.

② Yu. F. Samarin, *Sochineniya*, vol. 1, p. 40 (cited in F. Venturi, *Roots of Revolution*, 1964, p. 20); Khomiakov, *On Rural Russia* (cited in M. Malin, *op. cit.*, p. 311). このような見解を書物にまとめたのが、プロミンの人類学者ハクスタウゼンである。

A. von Haxthausen, *Studien über die inneren Zustände, das Volkswesen und insbesondere die handlichen Einrichtungen Rußlands*, 3 Bde, 1847, 1852, 1853. ハクスタウゼンに対するゲルツェンへの批判は『Крестьяная община』, т. 12, стр. 113-114; Дневник, 13 мая 1843, т. 2, стр. 281-282, を参照。

③ Дневник, 20 июня 1843, т. 2, стр. 288.

④ Там же.

⑤ Дневник, 9 июня 1844, т. 2, стр. 363.

⑥ Благое и Кумак, т. 9, стр. 149. 金子譯『過去と思索』一、三五二ページ。

⑦ 金子譯『Дневник, 12 февраля 1844, т. 2, стр. 335; Discours d'Alexandre Herzen, exilé russe, prononcé au meeting tenu le 27 février 1855 dans St-Martin's Hall, à Londres, en commémoration des grands mouvements révolutionnaires de 1848, т.

12. с. 247-248.

⑧ Дженни, 10 ноября 1843, т. 2, с. 314-315.

⑨ О развитии революционных идей в России, т. 7, с. 244. 金平訳『ロシアをける革命思想の発達について』一七〇ページ。

⑩ Дженни, 10 ноября 1843, т. 2, с. 315.

⑪ Дженни, 21 февраля 1844, т. 2, с. 336.

⑫ Дженни, 21 февраля 1843, т. 2, с. 278.

⑬ ロシアの後進性は即ち、偉大な未来の可能性の保障である、というテーマは、十九世紀のロシア思想全体にとり基本的であった、という言葉を参照。N. Berdyayev, *The Russian Idea*, 1947, p. 57. 田口貞夫訳『ロシア思想史』一九五八年、四四ページ。なお、ゲルツェンとスラブ派との思想的関係については、Tunguo Togawa, *Sur la formation de la théorie du Socialisme russe chez Herzen*. 『スラブ研究』四、一九六〇年）を参照。

二 ゲルツェンと西欧

つぎに、亡命後、一八五〇年頃までに、パリを舞台にくり広げられるゲルツェンの精神的ドラマを、彼の著『フランス・イタリアからの手紙』、『向う岸から』によってたどり、「ロシア社会主義」成立の上で二月革命がもつ意味を明らかにしたい^①。

1 西欧への失望

一八四八年以後、彼が西欧にたいしてしめした呪いに近

い絶望は、西欧派が西欧をユートピアと考え、期待とあこがれの眼でもって眺めていたことを考えずには理解できない^②。とりわけフランスは「革命と人権の国」であり、パリという名前は、「一七八九年および九三年のあの偉大な事件や偉大な大衆、偉大な人々の追憶と、また、思想のため、権利のため、人間の尊厳のためになされた偉大な闘争の追憶と」むすびついていたのである^③。

しかしながら、「ちようどエルサレムやローマに入る人たちのように、胸をとぎめかせ、敬虔な気持でパリに入った」^④彼がそこに見出したのは、物質的な富の追求のためにあらゆる崇高なもの、価値あるものを惜しげもなく捨て、臆面もなく泰平を謳歌するブルジョアのパリであった。彼はパリのブルジョアジーを通して、西欧社会にたいする最初の失望を味わったのである^⑤。

ゲルツェンにとりブルジョアジーとは、貪欲、偽善、うわべだけの謙譲、商売上の欲望、平凡さ、墮落したエゴイズム等々のシンボルであり、彼らには、偉大な過去もなければどのような未来もない。彼らは「否定として、過渡として、対立物として、自己弁護として、一時的に結構」な

のである。^⑥ 彼らが信じる唯一の宗教は、「ローマ的、封建的帰結を伴う私有財産制」である。^⑦ このブルジョアジーの卑小さを強調するために、彼が共感を示しつつ比較するのは、あるいは、フランス革命の最中に封建制度廃棄宣言を発して堂々と滅んだ貴族階級であり、^⑧ あるいは、貧しく粗野であるために、かえってブルジョアジーには失われた素朴さ、純粹さ、人間的な良さを残している下層の民衆であった。^⑨

そのようなブルジョアジーが支配する、七月王政下のフランスがわづらっている「疾患」を、彼はどうかとらえたか。彼によれば、フランス革命当時の高潔な理念や高尚な目的に代って、物質的な関心が、金が、経済学が支配するようになったことが疾患の原因であった。^⑩ 彼は続けていう。多数の人々の日々の糧や文明を、民衆の将来を左右する物質的福祉の問題は最も本質的で深く、また当然、現実の社会機構にかかわる問題である。それにもかかわらず、これまでに起こった革命では、経済的問題が解決されていない。現在、経済学は富に関する抽象的な科学となり、少数者が最大の利益を得るような、また、富の増加の法則を明らかに

にするようならくりを備え、現存政治機構を正しいものとして受けいられている、と。^⑪ このようにフランスの「疾患」を摘発し、「偏狭な、空論的な、俗物的形態の経済学」の支配を糾弾するときに彼の頭にあったのは、自由放任の経済政策であった。^⑫

ゲルツェンの厳しい批判の対象となったのは、ブルジョアジーだけではない。さらに、フランスの現状に不満を抱いてはいるが、その解決方法を知らない、社会主義者をはじめとする反体制派の人々も、彼の批判を免れることはできない。^⑬ ブルジョア経済学の支配に疑問を抱き、プロレタリアートを悲惨な状態から救い出すには、まず彼らの日々の糧を保証しなければならぬ、と理解した少数の人々が提出した批判の意義を彼は十分に認めはするが、この「批判と疑問とは、民衆のものではなかった」。^⑭ 彼は言う。民衆に必要なのは「でき上った学説、信仰」であり、「はっきりした目印」である。^⑮ しかるに、「強力な批判を行なう人は創造の才に乏しく」、創造的な想像力の欠けた、自己陶酔的なユートピアが次々と語られても民衆は理解できず、彼らは依然として何ものかを求めている、と。^⑯ 抽象的な理

想や純粹の経済学説をふりかざし、普遍性と現実生活、志向と応用とのむすびつきを欠くために、病めるフランスを治療するはずの「議會や雑誌の反対制派が、疾患の真の意味も有効な薬もしらず、常に少数派にとどまっている」のであった。^⑮

革命の都パリは、期待を裏切つて、実は満ち足りたブルジョアジーが支配する都であつた。そのうえ、ブルジョアジーを打倒するべき反体制派が微力であれば、少なくとも近い将来、革命が起る見込みは全くなかつた。社会主義者をもつて自ら任じ、革命の師フランスに謙虚に学ぼうとし、目前に革命が迫っていると夢想していたゲルツェンが、失望のつよさに反比例して、心中かたくなに社会主義的願望をつよめていったことは疑いない。^⑯だが、現実には「文学にも死、劇場にも死、政治にも死、演壇にも死、一方には生きた屍のゴゾー、他方には白髪の反体制派の子供っぽい片言……」というありさまであつた。^⑰

二月革命以後の彼の悲観的、否定的な思想を予想させる「嵐の前」という文章は、まさにこの時期に書かれたのであり、彼を思想的に位置づけるさいに、一つの重要な鍵と

なる。以下において私は、「嵐の前」の内容に即しながら、彼の歴史哲学的思索の跡をたどりたい。

ゲルツェンの歴史哲学は、彼の自然哲学にみられる唯物論と直接に結びつかず、人格主義的人間観を基調としてゐる。^⑱彼にとり、個人の人格はあらゆる価値のなかで最高の地位を占め、なにももの犠牲にもされてはならないのである。そして、人格の主題は自由の主題と結びつき、彼は「生」という名のもとに、抽象的、観念的な人間でなく、生身の人間の、個人の自由と尊厳とを熱烈に擁護した。この人格主義の哲学でもって、彼は歴史主義や決定論を批判し、歴史や社会を解釈する。

「嵐の前」は、書物の中の西欧でなく、はじめて実際の西欧を知つたゲルツェンの、夢からの覚醒宣言に始まっている。彼は、青年時代のように遠い未来を探り、真理を見出そうとする夢をすて、自分が理解できる範囲内の真理だけを求めて、争いの渦中から一步退き、静観するような態度を是認している。^⑲その彼には、怒り、苦しみ、抗議することは人間の権利だ、という主張も、現実を直視していないために生まれる「空虚な首尾一貫性」でしかなく、そこ

には、現実のおそろしさを忘れ、孤独感を避けようとする「臆病さ」さえうかがえる。現実を憤り、全生活を悲しむべき失敗、闘争、失望については十分ではないのである。^⑤

彼の抽象的で現状肯定的にきこえる言葉の裏に、われわれは何を読みとるべきであろうか。それは、前述のような、西欧社会への失望であろう。すなわち、彼が青年時代から西欧にたいして抱いてきた希望——それはなによりもまず、社会主義の即時実現という希望であろう——は、フランスでは実現されないものであり、彼は希望がかなえられないといつて、ただ憤ってばかりいることはやめたのである。

というのは、空しくなった希望にいつまでもしがみつき、現実を憤るだけでは、空理空論的な首尾一貫性でしかなく、現実の変革には少しも役立たないからであった。

さて、現実社会に悲観的な判断を下した彼は、次には、現在のわれわれの努力が、いつの日にか、われわれの死後ずっと先に報われるだろう、と考える「未来への信仰」を否定している。「新しい世界が、われわれのプランどおり
に建てられると信じる理由はない」^⑥。もっとも彼も、歴史に

おける進歩（発展）は否定しない^⑦。現在を直視し、「未来への信仰」を拒否することは、文明をすてて野蛮人の状態にもどることはない^⑧。このことは、スラブ派にたいする彼の批判からもうかがえよう。しかしながら、理想がそっくりそのまま実現されるという「不可避性」はどこにもない^⑨。

ここで彼が意図するのは、ルソー以来の「一方での思想の論理的一貫性」と「他方での思想の現実の前での完全な無力さ」という言葉からわかるように、すでに死の床に横たわっている世界を救済する、と称する西欧の空想的社会主義への批判であろう。彼は、既成の思想の無力さの原因を、「表現のしかたが悪いか」、「ただ理論的、書物的な意味しかない」点に見出したのである^⑩。

既成の理論が前提としているヘーゲル流の立場、すなわち、歴史が一定の論理に従って必然的、目的論的に発展するという立場に反対したゲルツェンは、次に、「可能性の歴史論」を展開する。彼によれば、「生には純粹理性の弁証法とはちがう、独自の発生学があり」^⑪、歴史には客観的な目的（結末）はない^⑫。「目的とは何か……誰がそれをつ

くったのか……義務的なかどうか。もしそうなら、われわれは……精神的に自由な存在なのか、機械の歯車なのか」。歴史の客観的な目的を求めることは、結果だけを見て肝心なことを見ないこと、人はただ死ぬために生まれる、といって泣くことを意味する。^⑤「もし人類がなんらかの結果に一直線に到達するなら、歴史ではなくて論理学である」。

ゲルツェンの歴史哲学においては、歴史の進歩は否定されていなが、進歩が歴史の全過程を貫き、進歩が歴史の目的であるとは考えられていない。^⑥「もし進歩が目的ならば、われわれは誰のために働くのか」。現代の人々は、未来の人々がよき楽しい生活を営むための捨て石ではなく、^⑦生を、現在を活用しなければならぬ。歴史はもつと流動的であり、各々の時代と生にはもつと豊富な内容があるはずなのである。^⑧

彼が提起したのは、社会主義的志向と現実との関連との問題、社会主義的理想の實現可能性の問題、一般的には、理論と現実との一致の保証にかんする問題であった。^⑨従来社会主義の理論は實現が可能かどうか、を検討しようとする彼の問題意識に、われわれはマルクスの問題意識と共に

通するものを見出せる。^⑩しかし、ゲルツェンは結果的にはマルクスと逆の方向へ進み、必然論を否定した。「歴史においてはずべてが即興であり、自由意志であり、即席である。前方には限界も、定期路もない。あるのはただ、さまざまな条件、神聖な不安、生の焔であり、戦士にたいして、自分の力をためせ、道さえあればどんなところへも行け、^⑪という呼びかけである。もし道がなければ、そのときは天才が道をひらくだろう」。そこで彼は必然性ではなく、偶然性に未来をかけ、行動する主体、自由意志、選択を重視した。未来は、「必然的でも偶然的でもある数多くの条件の総和と、予期せぬ劇的な効果をつけ加える人間の意志とによってかたちづくられる」のである。^⑫

亡命後一年たらずの間に味わった、西欧にたいする失望と、それへの反省とを以上のように表現したゲルツェンは、ここで一八四八年の「嵐」を体験したのであった。

① ゲルツェンの西欧にたいする失望の伏線として、次のような事情があげられる。大学時代以来の、たんなる自由主義的改革への不満の意識 (Бартоо и Румк, т. 8, стр. 161. 金子訳『過去と思索』1、106ページ。Дневник, 4, 18, 23 июня 1843, т. 2, стр. 284, 287, 288-289. また M. Malia, Alexander Herzen and the Birth of Russian

Socialism 1812-1855, Chap. 6, pp. 100-101, 119-121, 127, 131. 参考

照)。ルイ・ブジョンの著『十年史』(Histoire de dix ans, 1841-1844.) を読んで知った。西欧自由主義、ブルジョアジーの実態(Истинит., 4, 20, 23 ноября 1843. т. 2, стр. 284, 287, 288-289.)。四十年代の自由主義的西欧派との対立(M. Malia, op. cit., Chap. 13; F. Venturi, Roots of Revolution, pp. 24-26. を参照)。

② 後にマルシェンは次のように書いている。西欧派は「自らをなぞめるために(実際とは)異なった西欧を要求し、それをチェロとキリスト教徒が天国を信じるように信じた」(Духов и Кѣмль, т. 10, стр. 124.)。

③ Писма из Франции и Ирани, т. 5, стр. 141.

④ Там же.

⑤ 彼の失望は、ポーマルシエの小説の主人公の名を借りて語られる。すなわち、「ポーマルシエ時代のマイガロは法の外に、あったが、現代のマイガロは立法者である」と(Tam же, стр. 33.)。このような言葉からみれば「彼は、彼が用いる「ブルジョアジー」という語は、「精神的な俗物(Мѣтатель)」を意味する。したがって「ブルジョア」的のフランス＝西欧にたいする批判は、同時に西欧の俗物文明への批判でもある。

- ⑥ Там же, стр. 34.
- ⑦ Там же, стр. 34.
- ⑧ Там же, стр. 34.
- ⑨ Там же, стр. 57-58.
- ⑩ Там же, стр. 61.
- ⑪ Там же, стр. 57.
- ⑫ Там же.
- ⑬ Там же, стр. 62.
- ⑭ F. Venturi, op. cit., p. 27.

⑥ Там же, стр. 65.

⑦ Там же, стр. 46.

⑧ Там же, стр. 58-61.

⑨ Там же, стр. 59, 61.

⑩ Там же, стр. 62.

⑪ Там же, стр. 62, 128.

⑫ Там же, стр. 57.

⑬ Там же, стр. 57.

⑭ Там же, стр. 57.

⑮ Там же, стр. 57.

⑯ Там же, стр. 57.

⑰ Там же, стр. 57.

⑱ Там же, стр. 57.

⑲ Там же, стр. 57.

⑳ Там же, стр. 57.

㉑ Там же, стр. 57.

㉒ Там же, стр. 57.

㉓ Там же, стр. 57.

㉔ Там же, стр. 57.

㉕ Там же, стр. 57.

㉖ Там же, стр. 57.

㉗ Там же, стр. 57.

㉘ Там же, стр. 57.

㉙ Там же, стр. 57.

②0 Писма из Франции и Ирани, т. 5, стр. 245.

②1 自然哲学に關しては、彼のヘーゲル研究の成果である『自然研究書簡』『科学におけるディレッタントイズム』(一八四二―四六年)があり、この著作にみられる彼の唯物論的見解をめぐり、西欧派内部に論争、分裂がおつた。しかし、当時のゲルシェンと亡命後のゲルシェンとは大きな思想的断絶があり、そのあらわれが「嵐の前」にみられるのである。

②2 О роде боев, т. 6, стр. 19-20.

②3 Там же, стр. 20.

②4 Там же, стр. 25.

②5 Там же.

②6 Там же, стр. 29.

②7 次のような言葉を参照。勝利をえたと思つたときにギロチンにかかつていたルソーの弟子、彼らの平等の理想、フアランステール、民主主義、社会主義についての饒舌(Tam же, стр. 28-29.)。

②8 Там же, стр. 29.

②9 Там же, стр. 30-31.

③0 Там же, стр. 31.

③1 Там же, стр. 34.

③2 Там же, стр. 38.

③3 Там же, стр. 34.

③4 しか「嵐の前」での最初の言葉からわかるように、彼は自らの理論の実現可能性を檢討しようとしたのである。

③5 松岡保「ゲルシェンと二月革命(一)」(関西大学『経済論集』第十六卷第一号、昭和四一年四月)十六―十七、十九ページ参照。

③6 О роде боев, т. 6, стр. 36.

③7 Там же, стр. 30-31.

2 二月革命の批判

ゲルツェンは、フランスの二月革命勃発、臨時政府成立のしらせをローマで聞いた。マルクスはこの臨時政府を、「利害関係が相敵対していた種々の階級の妥協以外のものではありえなかった」と批評しているが、ゲルツェンにとっても、この共和国には大きな期待はもてず、彼は早くも反動の到来をさえず予想している。四月十三日にローマをたち、五月五日にパリに着いた彼の目の前に展開され、批判の対象となったのは、「パリのプロレタリアートが臨時政府におしつけた」、「社会的諸制度をもった共和制」から「ブルジョア共和制」への移行の過程であった。^③

ゲルツェンの二月革命にたいする評論の第一の要点は、普通選挙権にもとづく形式的民主主義の弊害についてである。五月四日に召集された憲法制定国民議会は、一七九三年の国民公会以後はじめて普通選挙によって選出された議会であり、まさにその故に、議会で多数を占めたのはブルジョア共和主義者であって、プロレタリアートの代表ルイ・ブランとアルベールとを執行委員会からしめ出したのであった。ゲルツェンは、この議会は恐怖に駆られたブル

ジョアジの気分を反映しており、民衆の真の要求を表現していない、とみてとり、「普通選挙権は形式的な政治の世界における最低の俗悪事」ときめつけたのである。^④ なぜなら、愚かで野蛮な権力としてでなく、自由な合意の結果としてあらわれ、歴史的な惨事としてでなく、愚劣な多数決と偽のスローガンを掲げた合理的な何ものかとしてあらわれ、崩壊しつつある政治組織をささえたこの共和制は、逆行的で、古い君主制の原理にもとづく最悪の共和制であるからであった。彼は、憲法制定国民議会の選挙から得た教訓を次のように述べる。「代議制度は、精神的な行動の準備と社会主義的要求とを変質させて、果てしない論争へとおいやる巧妙な策略である」。^⑤

ついで五月十五日、ブランキたちの議会侵入の試みの失敗は、彼の目に革命の政治的敗北と映った。「これに続くのは、共和国の敗北であろう」。パリケードが築かれてからまだ三ヵ月もたたないのに、「フランスはすでに隷従を欲している。自由はフランスには重荷なのだ」。^⑥

このように述べるとき、彼は、この革命において根本的に対立する二大勢力はなにか、をすでに見抜いていたとい

えよう。マルクスは、「正統王朝派やオルレアン派でさえ……プロレタリアートに対する闘争は、共和制の名においてのみ、おこなうことができた」と指摘し、共和制の実態を暴露しているが、ゲルツェンもまた、共和制の名の下に潜む「君主制の原理」を見逃さなかった。すなわち、この革命における基本的な闘争は、革命によって生み出された新しい勢力とフランスの政治に伝統的な中央集権主義者の勢力との闘争である、と。ここから、「(二月)共和制の敗北を喜ばないものは保守主義者である」という、あるいは、「いまや共和制とその法律、代議政治、市民、市民相互の、また市民と国家との関係についてのわれわれの観念を裁くときである」という見解も生まれてきたのであった。

六月事件は、革命勃発のしらせに一時的によみがえった彼の希望を完全に打ち砕き、彼の心を絶望と呪いとでみだし、社会主義者と自認する彼とブルジョア自由主義世界との訣別を決定的にした^⑩。王政復古以来、君主政治と封建的秩序の破壊を呼びかけてきた自由主義者は、本や議会での饒舌、博愛精神にみちた用語の中にでなく、現実のプロレタリアートが現われて彼らの要求を掲げるとわれに帰り、

「文明と秩序」を救うためにプロレタリアートを弾圧した。一言でいえば、「自由主義者は二月二四日まで、革命の理念と幸福に戯れていた」のだ、と彼は知ったのである^⑪。六月事件以後の事態の成り行きは、不幸にして彼の予想の正しさを証明し、彼はヨーロッパ滅亡の確信をつよめるばかりであった^⑫。

ゲルツェンはマルクスとは異なり、二月革命の敗因を倫理的、観念的に説明する。われわれは、その説明の根底に、近代社会においても消滅せず、依然として有力な封建的諸価値にたいする批判を見出すことができる。すなわち、ヨーロッパの人々が過去の権威、超絶的な原理の奴隷であったために革命は失敗したのであり、「どのようなものであっても、キリスト教的・封建的・ローマ的な基盤を保持しようとする人の心には、保守性と反動性とが眠っている」のである^⑬。彼は、人間の精神的な隷属と人格の屈従とをつよめるほとんどすべての世界観の底に、二元論を見出した^⑭。例えば、キリスト教のいう、精神と肉体との二元性は、具体的な個々の人間から独立した、抽象的な諸原理の存在を意味し、この諸原理を基盤にして権威、即ち専制政治が成

りたつのである。西欧の社会秩序のうちに、宗教と政治、教会と国家とは不可分に結びついている。君主制は本質的に宗教的であり、キリスト教の二元論の精神的直系に他ならない。ゆえに、たとえ統治の形態が君主制から共和制に変わっても、民衆の心にキリスト教信仰が生きつづけるかぎり、真実の人間解放は実現されないのである。^⑩「あらゆる宗教的なもの、政治的なものが人間的な、単純な、批判や否定を許すなにもかにならないかぎり、世界に真の自由はない」。^⑪

しかも恐るべきことは、君主主義者や保守主義者だけでなく、民主主義者や革命家までが旧世界からぬけ出せておらず、二元論の呪縛を免れていないことであつた。^⑫ゲルツェンは、人類の解放者と自称する西欧の民主主義者、社会主義者の致命的な誤りを、「自らを解放する前に、他人を解放しようとする」点に見出したのである。^⑬

このようにいうとき、ゲルツェンは自らの意図を、「不完全な革命家との完全な絶縁」にあるという。^⑭そして彼は、現代の革命家は（十八世紀の革命家のように、共和主義者であるだけでなく）社会主義者でなければならない、と考へた。

なぜなら今日では、共和主義者で同時に保守主義者であることはたやすいからである。^⑮しかしながら、二月共和制にみられるような折衷的な政治の時代はすでに去り、革命の理念と両立しない国家機構をもつヨーロッパは、早急に、根本的な変革——社会主義の実現か、あるいは破壊か、のいずれかを選ばねばならなくなった、とゲルツェンは主張する。^⑯西欧先進諸国までもが、新しい秩序をうちたてようとする社会的理念（社会主義）に対して、現存の国家形態をなんとか保持しようと、専制政治を求めようになつたいま、ロシアと西欧との間には「隷属の平等」が確立した。今や、専制政治が社会主義か、それ以外に選択の余地はない。^⑰ところが西欧は、社会的変革にさいし驚くべき無能力さをさらけ出した。これに対しゲルツェンは、西欧の絶対的優越という通念に疑問をいだき、ロシアは西欧ほど社会的変革において無力ではない、との確信を一八四八年以後説きつづけたのであつた。

究極の目標、社会主義社会実現の前提として、彼は共和制の実現を強調する。しかし、彼が考へる共和制は、「人民への関心も、思想もない」^⑱フランス第二共和制——これ

は、社会革命として始まった二月革命が、政治革命にとどめられた結果、成立した「政治的共和国」である——でな
 いことは明らかである。「真の平等と自由」の実現のため
 には、伝統的な権威を否定し、なんらかのかたちでの民衆
 の社会への参加を説く以外に、なにかが必要である。彼は
 それを、「現在の歴史的な社会機構の排除」ととらえた。
 共和国が現存社会機構を踏み越えた瞬間、それは社会的共
 和国となるのであった。^⑧

ゲルツェンは、社会主義と革命とを完全に一つであると
 確信していた。現代の革命思想こそ社会主義であり、社会
 主義以外は反動——そのなかには、共和制的なものもある。
 ——でしかなかった。彼が社会主義をどのように理解して
 いたか、社会主義社会を実現してどのような課題を解決し
 ようと考えていたか、は次の言葉からうかがえよう。「ふ
 つう、社会主義は資本、利子、労賃に関する問題、即ち、
 上品な形態での食人^{カンニョリズム}を絶滅するという問題の解決を究極
 の目標としている、と考えられている。これは完全にその
 とおりとはいえない。経済的な諸問題は大層重要である。
 しかしそれらは、所有権の悪用を絶滅することとならび同

じ基礎の上で、あらゆる君主制的、宗教的なものの絶滅を
 ……志向する統一的な見解の一面を形成するのである」^⑨。

① 「フランスにおける階級闘争」『マルクス・エンゲルス全集』(大月
 書店 第七巻十四ページ)。

② Писемка из Франции и Италии, т. 5, стр. 133.

③ 『マルクス・エンゲルス全集』第七巻「ブイエジ」。

④ Московский Круглый, т. 23, стр. 111.

⑤ С того берега, т. 6, стр. 74.

⑥ Писемка из Франции и Италии, т. 5, стр. 132.

⑦ 『マルクス・エンゲルス全集』同所。

⑧ Писемка из Франции и Италии, т. 5, стр. 137-138.

⑨ С того берега, т. 6, стр. 75.

⑩ Там же, стр. 46. ⑪ Там же, стр. 42-44.

⑫ Там же, стр. 52.

⑬ 六月事件以後の事態の経過は次のとおり。一八四八年十二月、愚か
 な普通選挙権によるルイ・ナポレオンの大統領当選。四九年六月、ル
 ドリッ・ロラン率いる山岳党の反乱の試みのみじめな失敗。五一年十
 二月、ナポレオン大統領のクーデターによる第二帝政の開始。

⑭ Писемка из Франции и Италии, т. 5, стр. 178.

⑮ С того берега, т. 6, стр. 126.

⑯ Дуэлици—это монархия, т. 12, стр. 226 и след.

⑰ С того берега, т. 6, стр. 47.

⑱ Там же, стр. 50-51.

⑲ Там же, стр. 51. 人類の解放者として、例えば、ルイ・ブラン
 (Писемка из Франции и Италии, т. 5, стр. 160, 165) や、ルド
 リッ・ロラン以下の一八四八年の「山岳党」(С того берега, т. 6, стр.

51) があげられている。ゲルツェンは、人類の解放者に対して自由人を対立させる。自由人は、「個人と社会との抗争がもつと頻繁に発生する危機の時代に生き、活動する自覚的な個人」であり、たとえ大衆と衝突することがあっても、自由な人格としての自己を主張しなされるならならぬ (『Там же, с. 120-122』)。

② Письмо к Д. Маццини, т. 24, с. 142.

③ Письма из Франции и Италии, т. 5, с. 177-178.

④ Там же, с. 178.

⑤ Бывое и Дулы, т. 9, с. 151. 金子訳『過去と思索』1、三五一ページ。

⑥ Письма из Франции и Италии, т. 5, с. 187.

⑦ Там же, с. 184.

⑧ Там же, с. 179.

⑨ Там же。社会主義者としてのゲルツェンは、現状変革の意図にもかかわらず、理想社会の構想、実現方法に關してはきわめて不明瞭にしか述べていない。彼がいくらかでも戰術的なことに言及したのは、二月革命の興奮の最中にフランスの共和制、君主制から眞の共和制への過渡的狀態としての革命的独裁に共感を示した程度であり、しかもフランスへの共感は一時的なものであった (『Там же, с. 158, 159』)。

ゲルツェンはむしろ、ブルードンの無政府主義思想に親近感を抱いてゐる (『Бывое и Дулы, т. 9, с. 23. 金子訳『過去と思索』1、二六八—二七一頁。『Там же, т. 10, с. 184. 金子訳前掲書 II 一九六六年一—二二二頁』)。

ゲルツェンにとり何より重要なのは旧体制の徹底した批判、破壊であり、新しい社会の組織ではなかつた (С. Громова, т. 6, с. 137. を参照)。ただし、西欧の空想的な社会主義を克服しようとした彼の意図そのものは、決して空想的ではなかつたといえる (III. М. Ленин, К вопросу об исторических особенностях русского

русского социализма. «Исторические записки», 1948, т. 26. 石川郁男訳『ロシア・ユートピア社会主義』一九六七年、三〇ページを参照)。

三 ロシア社会主義

——祖国への精神的復帰——

フランス大革命以来の、西欧の「政治革命」——それは、国家の形態のみを改造し、生活の形態にまで手をふれない——の限界を痛感させられたゲルツェンは、ロシアに独自の道を求めて、スラブ派の歴史哲学を見直した。スラブ派のいう、西欧の個人主義に優越するロシアの農村共同体は、ロシア的な社会主義の基盤となりうる。①「あらかじめ適した人民の生活様式なしには」、社会主義の実現は不可能であると考える彼は、社会主義をロシアの現実に合わせようと試みたのであった。

彼があらためてその革命的、性格を認識したロシアの農村共同体は、社会主義的諸關係の核を含んでいる。すなわち、農民のすぐれた道徳性と高度の勤労資質、土地の共同利用制度、農民の反権力的な性向と共同体内の自治制度、の三

点である。^④第一の素質にもとづき、農民間にはほとんど無制限の信頼、きわめて親密な人間関係が維持されて、共同作業がスムーズに行なわれており、解放後も共同体の統一を守るために好都合である。この素質が、「個人の自由と共同体とを一致させること」を社会主義の全問題とするゲルツェンにとり重要であった。^⑤第二の核——土地の共有、共同耕作、土地の定期的割り替えなどの慣習化、制度化——は、農民の土地つき解放と平等な土地利用とを社会主義的に理論化し、地主的土地所有と農奴制の廃止、農民への土地分配、農民の自治の確立を実現するための現実的根拠であった。最後の点も、「国家の観念も中央集権の観念もきらい、政府のあらゆる干渉から身を守るために、分散した共同体のなかで生きたいと願う」^⑥人民の意識を反映しているという意味で、きわめてスラブ的^⑦ロシア的であり、ローマ的^⑧キリスト教的^⑨封建的な、中央集権を好む西欧の道徳、諸制度と対立する。ゲルツェンがめざしたのは、地方分権的、多元的な農業共産主義の発展であり、国家に對抗して活動しうる、独立した、自発的な連合であったといえよう。^⑩彼が定義した「ロシア社会主義」は、次のよう

なものであった。「われわれがロシア社会主義と呼ぶのは、土地と農民生活や、耕地の事実上の分与と適当な再分割や、共同体的所有と経営にはじまり、労働者のアルテリとともに、一般に社会主義がめざしており、科学が確認しているところの経済的正義にむかってすすむ社会主義のことである」^⑪。

「ロシア社会主義」論の骨子は、西欧が提起したが、いまだに抽象的な思想のままにとどまっている社会主義と、外部から隔絶、孤立することによって保存されてきた「真に社会的な」^⑫ロシアの農村共同体との結合にある。ゲルツェンは、西欧社会に現実に存在するような個人の自由——それは、私有財産制とむすびつき、いわゆる「上品な形態の食」^{カンネリスム}人^⑬となる——は拒み、ロシアの農村共同体内に存在する（と考える）社会的自由——共同体による生存の保証——を認めはしたが、個人が共同体に埋没することには反対し、ロシアと西欧との長所をむすびつけようとした、といえる。

スラブ派の影響を受けた彼は、専制政治と農奴制が支配するロシアの現実を批判するための足場として、あるいは、

抵抗の武器として農村共同体に注目した。いわば、彼もスラブ派も、人間らしい生きかたの原型を過去に求めたといえる。とはいえ、彼はスラブ派とは異なって、過去の共同体をそっくりそのまま、未来社会にもちこもうとしたのではない^①。彼にとり、歴史は過去そのものへの復帰ではなく、共同体を足場にしてこれからつくり出されるものである。彼の専制政治と農奴制への抵抗の武器のつかい方は、専制政府との妥協、その是認の方向へ走ったスラブ派とはちがっていたといえる^②。

しかしながら、スラブ派と一部妥協し、土着的な農村共同体に注目したことは、ロシアが資本主義社会をとびこえて直接に社会主義社会を実現する、という理論を生む結果となった^③。彼にとっては、共同体における土地制度が農業生産力上昇の妨げになる、という指摘も、西欧式の土地所有制度のもとでの農業改良が、人口の大部分を深刻な窮乏におとしられている事実の前には、何ら説得力をもたない^④。「農学そのものの見地からすれば、飢えつつあるプロレタリアートが恐るべき状態に陥っていることも、若干の小作人の富の増大や農業技術の進歩によって正当な償いをうけ

ている^⑤」という見解を信じられない彼は、資本主義の生む種々の弊害を西欧で見て、資本主義を思想的に断罪したのであった。「歴史的に若い」ロシアは、西欧先進諸国の歴史に学び、西欧が陥ったブルジョア的、俗物的な発展の道を避けることができる。しかし、前方には多くの可能性があり、たんなる志向のみでは何ものも保証されない。可能性と不可避性との差異を強調し、未来を自らの手で、ロシアの内側からつかみとろうとするのがゲルツェンの立場であった。

① Пискаря к проповеднику, p. 18, стр. 277.

② 彼は、「ロシアへの信仰が、精神的な破壊の淵から私を救った」と『フランス・イタリアからの手紙』の序文に書いている (p. 5, стр. 10)。

③ 1864, p. 18, стр. 8.

④ 彼が希望を託する農村共同体の描写は、О разнице революционных идей в России, p. 7, стр. 259-263. 金子訳『ロシアにおける革命思想の発達について』一九三一一九九ページを参照。

⑤ Discours d'Alexandre Herzen, exilé russe, prononcé au meeting tenu le 27 février 1855 dans St-Martin's Hall, à Londres, en commémoration des grands mouvements révolutionnaires de 1848, p. 12, стр. 248.

⑥ Странный мир и Россия, p. 12, стр. 185.

⑦ ゲルツェンは「ローマ的・キリスト教的・封建的」あるいは「カト

リック・ローマ法、私有財産制」という言葉で西欧を攻撃するが、これは、スラブ派のキレエフスキーの「ローマ教会・ローマ文化・暴力征服によって成立した国家」という言葉を思わせる。

⑧ E. Lampert, *Studies in Rebellion*, p. 246.

⑨ *Порядок торжествует*, т. 19, стр. 193.

⑩ *Былое и думы*, т. 9, стр. 151. 金子訳『過去と思索』一、三五—三六。

⑪ 彼にとり共同体は、「われわれの生活の基礎」であり、スラブ派のいうように「思い出」ではなく、「年代記のなかにてなく、現在のなかに存在する生きた自然力」である。 Там же, стр. 149. 金子訳前掲書、同所。

⑫ 彼にとり共同体は手段であった、とツリアは指摘している。(M. Malin, *op. cit.*, pp. 404—405)。

⑬ 共同体を通して社会主義の実現を説くとき、「当然おこってくる疑問の一つは、ロシアはヨーロッパの発展のあらゆる段階を通過するか、それとも全く別の革命的発展をとげねばならないかということだ。私としてはくりかえす必要を完全に否定する」(Страды мир и Россия, т. 12, стр. 186)。

⑭ О развитии революционных идей в России, т. 7, стр. 263. 金子訳『ロシアにおける革命思想の発達について』一九八ページ。

⑮ Там же。

結 び

最後に、西欧の空想的社会主義思想と対比しながら、ゲルツェンの空想的社会主義思想の特徴をまとめてみよう。

(一) 一挙に全人類の救済をめざす普遍的性格、理論の中核としてのユートピアの構想は共通している。ただし、そこには西欧とロシアとの社会的背景の相違が反映しており、ユートピアはロシアの農村共同体に萌芽の形態で存在すると考えたゲルツェンは、普遍的、抽象的な自由や人間の尊厳性という価値から出発したままで、それ以上に詳しいプランを練りあげなかった。彼の社会主義は、終始、本質的に哲学的なものとどまつたのである。^①

(二) 理論の内容をみると、経済的教義ではなく、道徳的教義である。しかし、西欧の空想的社会主義は、理想実現の必然性を確認する歴史哲学を備えていたのにたいし、進歩、必然性という、いわば世俗化した宗教に反逆して可能性の歴史論を提唱したところに、ゲルツェンの獨自性がみられる。

(三) 強烈な現状批判の意識、資本主義社会下での人間のゆがみと分裂への批判、理想社会における人間性の順調な発展への志向は共通している。しかし、現状、とくに資本主義の機構分析の弱さは否めない。とりわけゲルツェンの場合、「俗物」^{Маньякство}という言葉での西欧資本主義社会の批判は、

きわめて表面的、感覺的である。

(四) (三)に述べたような限界にもかかわらず、西欧の空想的社会主義者は、資本主義の生産力について鋭い認識をみせた。他方ゲルツェンにおいては、資本主義の生産力についての認識、それを理想社会で生かす意図は欠けている。^③

(五)西欧の空想的社会主義者が見出せなかった変革の主体を、ゲルツェンは農民に見出した。彼の思想が、「労働者階級のイデオロギー」という意味においては、^④「人民による現支配体制の解体のあとに、資本主義社会をこえた理想社会を構想する」という意味で社会主義思想である、といわれるのはこのためである。

① T. G. Masaryk, *The Spirit of Russia*, 1961, vol. 1, p. 419. 佐々木俊次・行田良雄訳『ロシア思想史』Ⅰ、一九六二年、三二七ページ。

② サン・シモンからコントに受け継がれた「三段階説」による人間社会進歩の法則が典型である。

③ 「社会主義とその先行者としてのブルジョアの経済制度と保証制」(Bunoe n Ryum, p. 10, cnp. 185. 金子訳『過去と思索』Ⅱ、一一二ページ)。「工業」資本、機械、強化された生産性の巨大な発展にもかかわらず、old merry England がますます退屈なイギリスに、大食のイギリスがますます飢えたイギリスになっていく」(Tam me, G.P., 200. 金子訳前掲書、三七一ページ)などの認識にもかかわらず、彼はそこで立ち止まり、ロシアの農村をふりかえった。

④ 松田道雄「日本およびロシアの初期社会主義」(『ブルジョワ革命の比較研究』一九六五年、四二一ページ)。

(京都大学大学院学生)

Herzen's Theory of Russian Socialism with Special
Reference to the Process of its Formation

by

Hiroshi Matsubara

In the Soviet Union Alexander Herzen has been regarded almost exclusively as a Revolutionary Democrat, and hardly as a Utopian Socialist. The aim of this paper is to evaluate him as a Utopian Socialist—a character which is revealed in his theory of Russian Socialism. In my opinion two factors contributed to the formation of this theory. First, the dispute between the Slavophiles and the pro-Westerns in which he was involved. Second, the failure of the February Revolution he witnessed in France during his exile there. These factors are to be traced and identified in his diary, “My Past and Thought” (autobiography), “From the Other Shore” and “Letters from France and Italy.”

Vagrancy in the Nara 奈良 Era and Keiki-keicho 京畿計帳

by

Yasutaka Nagayama

The argument over vagrancy in the era of Nara 奈良 has been made on the commentary upon fugitives in Keiki-keicho 京畿計帳, with the premise that the difference of its commenting form corresponds with that of the realities of vagrancy, while aspects of fugitives in Keiki-keicho show generally those in the Nara era. To consider carefully, the above premise is not altogether an authentic one. The prescription of the order that six-year fugitives be exempted from the code had not been executed; what is more, at least in the case of Cho 調, as persons with remission of duties were made to be those with duties, so persons with duties to be those with remission of duties, which is thought to be incomprehensible measures.

Future examination of vagrancy in the Nara era needs thorough study of the character of Keiki-keicho as an original source.